向こう側

長谷川七郎

メコン Mekong……チベット高原に発源、山系の走向に従って南東流、後、南流、雲南省及びラオス、タイの境を流れ、カンボジアを貫流、ベトナム南部で南シナ海に注ぐ……長さ四五〇〇キロメートル（広辞苑）

油照りの道をジープで突切り
最北端国境の検問を抜け
荒れ毀たれた遺跡を縫って
たどりついた川べりだが
ニッパヤシで葺いた四阿（あずまや）が
流れに沿って散らばっている
なんの変哲もない
赤茶けた濁流と
手に取るように見える　向こう岸の緑
その後に続く丘陵のつらなり

長い澱んだ時間を
どこから集って　どこへ散るのか
熱い日射しを避けた人影は
いつまでもうごかない

立ちどまったり
ゆっくり徘徊する
カキ色の防暑服も
腰に垂れさがった拳銃がなければ
国境警備隊の区別もつかない

止り木に　飼われた小鳥が首をかしげ
無心に川面を見ている

ここから向こう側にはわたれない

コーズウェイ

細い水道が
二つの　海峡にわかれる
かつての海峡植民地　海の三叉路

人っ気のない伽藍堂の回教寺院（モスク）の昼さがり
海峡を見下す
半円花弁形の　ステエンド　グラスから
三原色の日が射しこむ
タンカーに交って　褐色の帆を張った　ジャンクが
　とおる

海岸通りの並木に
イルミネーションの裸電球が点る
気懈い日没を待つまで
灼けつく熱帯の日が　荒砥のように
頭のてっぺんから　からだをすりへらす

コーズウェイをすぎる

国境をつなぐ　出稼ぎの集団
カービン銃を構えた　きびしい通関に
両手をあげてボディチェックをうける長い列

愛情故事（ラブストオリイ）の結末はどうでもいいが
神の公平な摂理や裁きを語るガイドの
流暢な言葉はてんでわからない
彫りのふかい　混血オンナに見惚れてまどろむと
うろ覚えの章句が
とぎれ　とぎれに風にとぶ

大和夜歩き

断章六片

寺島珠雄

赤い暈の月光下。
蔵や塀のほのかな白がとぎれると
自動販売機があった。
公衆電話があった。

＊

寺の前を通過しながら
ほめそやされている仏像の姿を思った。
どれだけの夜と日を
オツカレサマに。

＊

水面。
その向うに前方後円墳の影。
はるかには高層集合住宅群の灯。
現古墳。
未来古墳擬い。
それも地球がまだあればの話。
蛙鳴く。

＊

夜気のなか。
頬にふれる
蜘蛛の糸らしき浮游物。
樹も家も遠い野道で
そこから痺れがくる。

＊

闌けたツバナの川べりに
仕掛けたままのチェンブロック。
ヒューム管に腰かけてたばこ。
ことさらに大和と思ういやらしさ
天皇の呪術。夜は夜。

＊

どこへも近づかない　どこからも遠くなる
そんな具合に
歩きたかったのだ。

（80・6・22）

萩・街あるき

―中野重治を偲び

吉田欣一

下関にある流域文学会から『中野重治に学ぶ映画と講演の集い』に来て話をしてくれないかとの連絡があって、それには旧知の福島久嘉さんからのたっての頼みとあって引受けたのだが、こと中野重治についての話となれば私としては話の上手下手を越えて、やらねばなるまいという自らの内から燃えるものがあったのでもある。

特に流域文学会事務局の富田浩史さんが下関の若い労働者がお待ちしていますとの便りを貰って私は私の話の内容が〈中野重治への一視点〉となっていて、中野重治が秋山清と二人で組んでやった仕事として、一九五一年の「人間」誌上の〈現代民衆詩選〉の意義と無名詩集〈祖国の砂〉のこと、また新日本文学誌上に連載した〈サークル詩めぐり〉それから国鉄労働者詩人浜口国雄の中野重治への傾倒と中野重治の浜口国雄へ詩集序文のことにふれての話を中心にすえていたので、それらの一視点としての中野重治の文学への眼くばりのことを若い労働者に聞いてもらうこととしてあったのでいっそう私は喜こんで行くこととなった。

七月五日午後六時より下関労働会館の大講堂は富田さんの言葉どおり若い労働者でいっぱいであった。外は雷鳴と雨であった。流域文学会代表の富成博さんの挨拶ではじまり、「偲ぶ中野重治」映画ではじまったが、生前の中野重治がそこに現われたことで私は胸がつまってしまった、神山茂夫の告別式で話す元気な中野のかみしめるような話ぶりに魅せられていく自分をそこにみた。またそれが一転して中野重治の告別式となってかさなるこの映画は最後に自作詩「わたしは嘆かずにはいられない」を朗読する中野の声と共に人々の胸をしめつけずにはおかない勝れた映画である。

「中野文学の人民性について」福島久嘉さんが一時間三十分程話されて、私の番がきた。私は映画を見た後のこころのざわめきがあったので、予定した話の順序が崩れて、そのこころのざわめきから話を始めていった。それが良かったか悪かったかは解らないが、一生懸命しゃべっている壇上の自分をそこに見た落着きだけはあった。

私は下関に行くについて福島さんに中野重治の小説で『萩のもんかきや』というのがあるが是非「萩」へ行きたいので案内してくれないかと頼み快諾を得ていたのでそれがこんどの私の楽しみの一つでもあった。私は下関と萩とは近くにあると思っていた。同じ山口県でもそれは山陽と山陰との違いの通りかなり離れた所と知った時、これは大変なことをしたと思った。七月六日は流域文学会の人たちと四時間ばかり詩の話をして、私の泊めてもらった〈望関荘〉を後にして萩市へ向った。昨夜〈望関荘〉の窓から見た下関市の夜景は素晴らしく、夜中に海峡を通る船の汽笛も旅愁をさそうものがあった。

流域文学会萩支部の枇杷木さん母子と福島さんの車が案内の先行で私と若き労働者、小田君、柿本君が運転してくれる車で、山間を雨の中をわざわざ秋吉台の高原を通ってくれて、それは印象鮮やかな旅でもあった。萩市の武家屋敷の土塀にそって街中を行き案内されその夜は福島さんと川畔の民宿「東萩」に

泊った。

七月七日雨、枇杷木徹也君の車で萩市の吉田松蔭神社へ、話に聞き歴史にうとい私でも知っている松下村塾を見たり、高杉晋作の生家を見たりして、いよいよ待望の『萩のもんかきや』へと向った。

〈そのとき私は萩の町をあるいていた。私はぶらぶら歩いていた。私の用事はすんでいた。私は一ぶらつきぶらついて……〉の書き出しではじまる『萩のもんかきや』の中野重治のあるいた道筋をたどることになった。この作品は一九五六年八月に書いたもので中野重治五十四歳の時である。年譜によれば一月十七日妹鈴子上京。三井厚生病院に入院。二月十四日、胆石の手術をする。三月七日退院。ちなみにこの年の四月十五日には、中野鈴子詩集『花もわたしを知らない』の出版記念会が東京で開かれ、室生犀星、壺井栄、佐多稲子、伊藤信吉の発起で千代田区のトミ・グリルで開かれ、三好達治、堀たえ子らも出席している。また六月二十四日には上野精養軒で『むらぎも』の毎日出版文化賞受賞を記念し、あわせて作者を激励する会」がひらかれている。

中野重治の作家としての油ののった時でもあったなと私には思われる。

二十四年前の中野重治の歩いた萩の町と今では武家屋敷は別として、もんかきやのある町筋は大きく変化していることだろう。

もんかきやのある通りは繁華街でもある。

福島さんが「この郵便局から送ろうとしたのだ」と郵便局の前で立ちどまった。

〈そのときそこに大きな郵便局が見えてきた。郵便局は右手にある。すると、郵便局のまん前が菓子屋なのが目にはいった。私はずいと菓子屋へ入った。私は、旅に出ても土産を買ってきてくれたことがないといっていつも非難した私の娘のことを思いだしたのだった。「ここで包みにして、前の郵便局から郵便で送ってしまえばいい」〉と書かれているところだ。ここで作者は娘への土産物として夏蜜柑の砂糖漬けを買うわけだが、〈現に萩名物という文字が書いてある。実は、私は、これが好きだったのだ〉という夏蜜柑の砂糖漬けは福島さんがすでに私への土産として〝萩乃薫〟を買ってくれていた。

〈町の容子がすこし変ってきた。道路の上の小店がそのへんでなくなっている。町屋そのものも変ってきた。穀物店の小さいのがあり

ふるさと

暮尾淳

仲間を離れ
そのむかし街のはずれの
震動する陸橋に立つと
トラックは行き交い
何ごとのためか
物量は運ばれ、
傷だらけのジーゼルカーが
雑草のなかで
秋のひざしを浴びている。
レールは南に走り
季節のすがたの山裾を
汽笛が消えたその向うは
もう寒い海。
方角を北に定め
風呂敷包みをかかえ
勾配を下りる。
白昼の騒音は絶えず
昔とおなじ店の奥から
ガラスの目をした
剝製の禽獣たち。
人口百万。
特別市を祝うふるさとに
冬は雪が降るだろう。

時計屋があり、歯医者がありして、それからはそれもぽつぽつになった。しもた屋というまでではない。それでも、何となく裏通りといった感じの町になった〉と書かれているこの通りは郵便局のあるこのにぎやかな町筋で問題のもんかきやは郵便局からいくらも離れていないところにあるのでこの描写はいくらか事実と違っているなと私は歩きながら思う。それはあった。「もんかきや」と木の小さい板に、今も仮名でそう書いて打ちつけてある。白のペンキの下地に、赤のペンキで書かれていた。今は屋根のところにもうひとつ〝三隅もんかきや〟小さい看板が出ていた。

〈そのとき私は妙なものを見つけた。ちっぽけな店、そこに、ガラス戸の向うにこっちを向いている女、それがまず目にはいった。店といっても、何の店だかわからない、店であるかさえはっきりはしない。しかし住宅ではない。住宅なら女が、往来に接して、ガラス戸越しにこっちを向いているはずがない。ただし、こっちを向いてるとはいっても女は、こっち向きに顔をうつむけている。おそろしく立派な鼻だけが見える。女はそうやって、何だか一心にやっているらしい。私は歩みより気味にそれを見ようとした。〉

〈右手に細筆を握っている。その穂がおそろしく細い。日本画家なんかがあんなの使うかもしれない。錐の穂か何かのように見える。それを、穂先が手前へ傾斜するくらいの角度できゅっと握っている。〉

〈やっとそれが羽織か何かへ抱き茗荷をかきこんでいるところだとわかって私はほっとしたが、私はほとんど労れた。〉

〈鼻の高い美人が——それは、あの肩つきからみて、背も高い美人にちがいない。——戦死者の寡婦で「もんかきや」だということがその「もんかきや」という仕事が、機械も動力も使わない全くの手仕事だということが、また紋つきの紋をかくというその商売が、女の鼻が西洋人のように高いだけにつらいものに見えてくる。「もんかきや」——言い方が古いだけ、その分量だけ逆にあたらしい辛さがそこからひびいてくるようにも思う。いくらかだらけたような、気楽で無責任な感じだった私がいきなり別の気持ちになったわけではない。それでも、「もんかきや、萩のもんかきや……」といった調子で私はいくらか急いで歩いて行った。〉

福島さんは「もんかきや」の中へ入って案

その場面

押切順三

一九六六年八月二四日の朝であった。
太平湖の泥水のなかで、
一人の老人が死んでいた。
老舎・この時六十七歳。
背中を突いたのがいる。
そのまま、のめりこんだ。
頭を押さえつけられた、
——こどものころの、おもちゃに
日光写真というのがあって、
しばらく日にかざしていると
タネ紙に白黒の影像があらわれる。
いま、時空をこえて
白黒の、物の形が見えてくる。
一つの場面が、私のなかに浮いてくる、
なぜだ、いま。——
年老いて病んでいた。
なにしろ、ろくなものも食っていなかった、
あぶくが二つ三つ、
書いたものはみな真実だ、
それが私のすべてだ。
だがいま私は病んで、
おどおどと、詩を献じているだけだ。
よれよれの、この年よりを
いじめていじめて、
おまえを追放すると
権力は反りかえった。
その興奮は、中風の前駆症状だ。
あわれな毛であった。
猥雑に、なにを叫んでいるのだ、
顔に赤味がはしった。
その指先で、この私を刺そうというのか。
——私の日光写真のタネ紙に、
白黒の像があらわれる。
濃く、うすくそして消えていく。
おどおどと、詩を献じている男、
病んでのめって水に浮かんだ男を、
私はよく知っている。
いま、このタネ紙は
先の時間を映しだしているのだ。——

内を乞うと、しばらくして細い体つきで背の高い女の人が出て来られた、私はこの人だなと直感的に思う。福島さんが中野重治の小説に「萩のもんかきや」というのがあるが知って居られるかと女の人に聞けば、近所の娘さんがその本をもってきてくれたので読んだと言うことである。福島さんが心臓強くも『もんかき』の実演をしてくれないかと頼む、女の人は心よく引きうけて実演してくれた。それは中野重治が、道からのぞきこんでくわしく描写しているそのとおりであった。

うっすらと化粧をしたその人は美しい女の人であり、どことなく気位いの高さを感じさせるものがあったが、気安く応じてくれた優しさはまた旅の人である私には忘れられない思い出ともなろう。二十四年前にこの人を見た中野重治はこの人のことを美人にちがいないと確信したが、私も逢ってそれはうなずけるものがあった。「もんかき」を実際にやってくれたところ、それを道から細かく観察した中野重治のポーズもこうであったろうかと、それを道からまねて見つめながら私は私も萩に来たのだの実感をかみしめていた。

——一九八〇・七・一一——

一九八〇年五月一日

北本哲三

毎日ごくろうさん
父ちゃん
きょうはメーデー
子供たちも一緒に
乾杯でもしましょうよ
ただ一点の明るさか、
おまえの笑顔が眩しく浮ぶ。
ご馳走つくり
お酒の燗でもしているか。
かあちゃんよ、
ついでに、風呂も、ネ
羽をたたんで、
尾羽も、垂れて、
しょぼしょぼと歩いている。
しょぼしょぼとつづいている。
土砂降りの雨。
ときどきどっと
風も加わり。
一九八〇年五月一日。

ぬれ鼠というより
水からあがった鶏みたい、
曳かれるみたいに歩いている。
垂れて、はりついている旗。
雨が音たてるプラカード。
そんなのが　延延つづくから
舗道にはねる雨脚だけが白く、
土砂降りの街は
ますます暗い。
タスキをかけた幹部たちが
トラックの上で
何か叫んで
ときどき拳をふり上げる。
だが、行列はすでに冷えて
紫色の唇から舌打ちさえもれている。

編集後記

原稿〆切ということは守れないものらしい。今回はうんと早くから予告した上に、さらに十日間延期したが、それでもダメだった。〆切日になって、すぐ送るとか、電話などかけて来るよりも、期日に間にあわなければ今回は止めるとか、同人だから絶対に入れろとか、なんとか、かんとか、自分のことは棚に上げて文句をいって来るような元気者もいないのだから、張合いもないが、ボクはもう編集責任期間を終ったからいいが、次をやる人の苦労が気にかかる。一人がおくれれば全体が足ぶみしてる、という現実に目をつぶっちゃ、仕様がない。人民詩精神を去ること遠し。

近頃、ひろくわれわれの仲間の詩集が出ている。今年になって完ぺきな『中野重治詩集』が出、中野鈴子の全詩集も完全に出来、本号に西がなかなかいい批評を書いてくれた。またこれは私の編集で、完ぺきとは程遠いが植村諦の『鎮魂歌』も出た。また小野十三郎が『環濠城塞歌』というむずかしい名の詩集を出した。一寸目次を見ると作品が五、六百はありそうな大詩集。あきれたものである。糖が出て疲れる由をきいたがこんなに詩をかいちゃ、糖以外のものも出るかもしれない。僕はやがて皆が忘れてしまったような顔している生活の詩をかき始めようかと思っている。詩は自分のために書く、とはどういうことかなどの議論は、多分もう倦きたのだろう。（八〇・七）　秋山

雨天

内田 博

小雨の
舗道を歩いてきた。
ずぶ濡れ
ころころした褐色の仔犬が
電柱の影から出て来、
くびかしげ俺を見上げた。
昨日も今日も
随分とながい日々を
こいつらにものが云えるか
場所がらではないとの思いが
霧のひろがりのように俺をつつむ。
ひびき合う言葉などある筈もなく
なんでもなかった転向が
ごろごろあり
べたっとたした民主主義
日中友好があり
かれらの拷問、銃口がある。
しかしどうして
ゆんべもがぶがぶ酒をあふって
なんであんな男たちの前で
ゴッホのかなしみなど俺は喋ったか。

いつの間にか
西駅前まで歩いていた。
家の灯
店の灯のひとつひとつが消えてゆき
最後に野の灯が消えた。
しんからの暗闇
雨ながれる
プラット・ホームだけが横たわっていた。
あのあたりだ
リュック背にしたひとりの復員兵に
三池町の方角を問われた。
いまそこで
人を殺（や）ってきたといった
痩せあおぐろい貌だった。
寥々瓦礫の闇に
ふっとそいつのうしろ姿が消えた。

九州全域
大雨洪水注意報。
家の灯
店の灯が雨しぶく舗道に映える。
　戦後ずたずた
　おれの戦後もずたずたに。
黒こげ屍体などどこにもなく
　結構さだけが残り。
こどもの俺は
よごれ仔犬を抱きあげた。
ふり返っても
ころころ仔犬はいないのだ。
いきなり風にあふられる。
断崖そこに。
帰りつく前ずぶ濡れになる。

寺島珠雄

四六判上製本◆288ページ◆10月新刊

断崖のある風景
小野十三郎ノート

定価1600円（送料200円）

◆本書は、詩人小野十三郎を生活と作品両面からとらえたものである。著者は八年間にわたって、独自な取材活動で小野の埋れた作品を発掘し、背景になった時代や人びとに関連する書誌を収集した。それら豊富な資料を駆使して、草創期の詩や評論活動、アナキズム運動への参加までの小野十三郎像を描出している。
◆同時に、小野の活動に重なる時代、大正から昭和初期という解放気運の開花した時代を、縦横無尽に駆けめぐった若い詩人たち、アナキスト群像を魅力的に描写する。五〇年以上も前の、現代とは較べものにならない強権の支配した時代に、驚くほどの自由精神を有し、また、烈しく反逆した人びとの存在は鮮烈である。
◆本書で書かれた時代は、詩人の出生から昭和3年までである。以下続刊予定

◆小野十三郎第一詩集『半分開いた窓』発刊の頃開催されたイベント・ポスター。矢橋公麿制作。当日、自作詩篇朗読に小野も出演した

プレイガイドジャーナル社
〒542大阪市南区塩町通3・2・1・207
電話06・251・9251　振替大阪21561

前ぶれ

大分以前から、二三の同人の申入れもあって、全国的な同人会をやろうという話が、東京同人の間で考えられてきた。ようやくその話が具体化して来た。

前の東京同人会ニュースでその片鱗を知らせていたが、その後やや前進し、九月十五、十六日をえらんで実行しようと、準備に当った者たちが工夫をこらしている。

十年も前、日比谷で雑誌と詩集の展示会をやったことがある。まだ斉藤峻が元気で、日比谷図書館の課長を定年で止めたばかりの時で、つまり彼が図書館内に展示場を確保してくれたのだったと思う。このときも全同人出席となっていたが、同人会そのものとして内部に向ける討論等は出来なかった。たしかに外に向けての仕事としては、もうふたたび出来まいと思われる程のものだったが、今回の狙いは主旨がちがう。コスモス創刊からもう三十五年、この間われわれの詩についての主張は「人民詩精神」に終始して来たが、それで十分か。あるいはまた「人民詩精神」の現在での在り方は今のままでいいのか。もっと当初のものの強力な主張もあっていいといった考え方だってなければなるまい。全同人が出席してその考え方を披露し、また討論することも大いになけらにゃならない時じゃないか。

ぼくらは、この雑誌が出来て以来、たじろがず一つの精神でやってきて不安を感じていないが、疑問をその内実について抱くことも大切であろう。そんな、異った考え方で叩きあうことも、楽しいことではないだろうか。

前回の東京同人会で、今度の集会の責任者もきめたし、何の苦労もなしにその席に出る幸運を味わえると思って、期待するところは大きい。

第一、ぼくでさえ全同人の顔を知っていない。どんな議論や主張が出るか、新しいものは何でもたのしいのだから、待つ心も深いといえようか。

東京で開催する予定であるが、東京の同人たちには、これからの協力が求められることだろう。余白を借りて、全同人会の前ぶれだけをしゃべった、というところ。

（秋山）

コスモス　第30号　（通巻69号）
〈定価五〇〇円　〒一二〇円〉
発行　一九八〇年九月一日
編集人　秋山　清
発行所　東京都中野区上鷺宮五―一八―八
コスモス社
電話(03)九九八―二九二五
印刷　（資）オカダ印刷
名古屋市昭和区長戸町四―二〇